

平成29年度 A 6

〔ここまでのあらすじ〕 「自分」は、眠つて夢を見ている。夢の中にいる「自分」は、運慶の評判を聞き、運慶の仕事ぶりを見に行く。

〔ここまでのあらすじ〕 「自分」は、眠つて夢を見ている。夢の中にいる「自分」は、運慶の評判を聞き、運慶の仕事ぶりを見に行く。

運慶は見物人の評判には委細頓着なく鑿と槌を動かしている。いつこう振り向きもしない。高い所に乗つて、仁王の顔の辺をしきりに彫り抜いて行く。

運慶は頭に小さい鳥帽子のようなものを乗せて、素袍だか何だか別らない大きな袖を背中で括つていて。その様子がいかにも古くさい。わいわい言つてゐる見物人とはまるで釣り合いがとれないようである。自分はどうして今時分まで運慶が生きているのかなど思つた。どうも不思議なことがあるものだと考えながら、やはり立つて見ていた。

しかし運慶のほうでは不思議とも奇体ともどんと感じ得ない様子で一生懸命に彫つてゐる。仰向いてこの態度を眺めていた一人の若い男が、自分のほうを振り向いて、

「さすがは運慶だな。眼中に我々なし。天下の英雄はただ仁王と我とあるのみという態度だ。あっぱれだ」と言つて賞めだした。

自分はこの言葉を面白いと思つた。それでちょっと若い男のほうを見ると、若い男

は、すかさず、「あの鑿と槌の使い方を見たまえ。自在の妙境に達している」と言つた。

運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り抜いて、鑿の歯を堅に返すや否や斜に、上から槌を打ち下ろした。堅い木を一刻みに削つて、厚い木屑が槌の声に応じて飛んだ

と思つたら、小鼻のおつ開いた怒り鼻の側面がたちまち浮き上がりつてきた。その刀の入れ方がいかにも無遠慮であつた。そうして少しも疑念を挟んでおらんように見えた。

「よくああ無造作に鑿を使って、思うような眉や鼻が出来るものだな」と自分はあんまり感心したから独り言のように言つた。するとさつきの若い男が、

「なのに、あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あのとおりの眉や鼻が木の中に埋まっているのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなものだから決して間違はずはない」と言つた。

自分はこの時はじめて彫刻とはそんなものかと思いだした。はたしてどうなら誰にでも出来ることだと思いだした。それで急に自分も仁王が彫つてみたくなつたから見物をやめてさつそく家へ帰つた。

道具箱から鑿と金槌を持ち出して、裏へ出てみると、せんだつての暴風で倒れた櫻を、薪にするつもりで、木挽に挽かせた手頃なやつが、たくさん積んであつた。

自分は一番大きいのを選んで、勢いよく彫りはじめてみたが、不幸にして、仁王は見当らなかつた。その後のにも運悪く掘り当つてることが出来なかつた。三番目のにも仁王はいなかつた。自分は積んである薪を片つ端から彫つてみたが、どれもこれも仁王を藏しているのはなかつた。

(注1) 委細頗着なく細かいことを気にしない。

(注2) 不思議とも奇体とも不思議であるとも奇妙であるとも。

(注3) 大自在の妙境=少しの束縛もなく、自由な境地。

(注4) 竪に返すや否や斜に縦に返すとすぐに斜めに。

(注5) 木挽に挽かせた=製材することを仕事にしている人に切らせた。



(夏目漱石「夢十夜」による。)

―――― 線部「どれもこれも仁王おとこを藏くわしているのはなかった」とあります、この部分の意味として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 木挽が隠した仁王を見付けられなかつた。
- 2 木が堅くて鑿では仁王を掘り出せなかつた。
- 3 薪が小さすぎて仁王が入つていなかつた。
- 4 仁王を彫刻することはできなかつた。

解答らん



解答

平成29年度 A 6

- 〔こここまであらすじ〕 「自分」は、眠つて夢を見ている。夢の中にいる「自分」は、運慶の評判を聞き、運慶の仕事ぶりを見に行く。

〔こここまであらすじ〕 「自分」は、眠つて夢を見ている。夢の中にいる「自分」は、運慶の評判を聞き、運慶の仕事ぶりを見に行く。

運慶は見物人の評判には委細頓着なく鑿と槌を動かしている。いつこう振り向きもしない。高い所に乗つて、仁王の顔の辺をしきりに彫り抜いて行く。

運慶は頭に小さい鳥帽子のようなものを乗せて、素袍だか何だか別らない大きな袖を背中で括つていて。その様子がいかにも古くさい。わいわい言つてゐる見物人とはまるで釣り合いがとれないようである。自分はどうして今時分まで運慶が生きているのかなと思つた。どうも不思議なことがあるものだと考えながら、やはり立つて見ていた。

しかし運慶のほうでは不思議とも奇体ともどんと感じ得ない様子で一生懸命に彫つてゐる。仰向いてこの態度を眺めていた一人の若い男が、自分のほうを振り向いて、

「さすがは運慶だな。眼中に我々なし。天下の英雄はただ仁王と我とあるのみという態度だ。あっぱれだ」と言つて賞めだした。

自分はこの言葉を面白いと思つた。それでちょっと若い男のほうを見ると、若い男

は、すかさず、「あの鑿と槌の使い方を見たまえ。自在の妙境に達している」と言つた。

運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り抜いて、鑿の歯を堅に返すや否や斜に、上から槌を打ち下ろした。堅い木を一刻みに削つて、厚い木屑が槌の声に応じて飛んだ

と思つたら、小鼻のおつ開いた怒り鼻の側面がたちまち浮き上がりつてきた。その刀の入れ方がいかにも無遠慮であつた。そうして少しも疑念を挟んでおらんように見えた。

「よくああ無造作に鑿を使って、思うような眉や鼻が出来るものだな」と自分はあんまり感心したから独り言のように言つた。するところさつきの若い男が、

「なのに、あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あのとおりの眉や鼻が木の中に埋まっているのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなものだから決して間違はずはない」と言つた。

自分はこの時はじめて彫刻とはそんなものかと思いだした。はたしてどうなら誰にでも出来ることだと思いだした。それで急に自分も仁王が彫つてみたくなつたから見物をやめてさつそく家へ帰つた。

道具箱から鑿と金槌を持ち出して、裏へ出てみると、せんだつての暴風で倒れた櫻を、薪にするつもりで、木挽に挽かせた手頃なやつが、たくさん積んであつた。

自分は一番大きいのを選んで、勢いよく彫りはじめてみたが、不幸にして、仁王は見当らなかつた。その後のにも運悪く掘り当つてることが出来なかつた。三番目のにも仁王はいなかつた。自分は積んである薪を片つ端から彫つてみたが、どれもこれも仁王を藏しているのはなかつた。

(注1) 委細頗着なく細かいことを気にしない。

(注2) 不思議とも奇体とも不思議であるとも奇妙であるとも。

(注3) 大自在の妙境=少しの束縛もなく、自由な境地。

(注4) 竪に返すや否や斜に縱に返すとすぐに斜めに。

(注5) 木挽に挽かせた=製材することを仕事にしている人に切らせた。



参考

(夏目漱石「夢十夜」による。)

―― 線部「どれもこれも仁王おとこを藏くわしているのはなかった」とあります、この部分の意味として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 木挽が隠した仁王を見付けられなかつた。
- 2 木が堅くて鑿では仁王を掘り出せなかつた。
- 3 薪が小さすぎて仁王が入つていなかつた。
- 4 仁王を彫刻することはできなかつた。

解答らん

